童話長篇

全

862
45

国立国会図書館　タイトル『童話長篇』 請求記号 862-45

ガラス使用

862-45

童話長篇

黒澤翁滿原著
小田清雄校正補註

小田清雄云「ひゝなあそび」は源語若紫巻に源氏君の詞に「いざたまへよ、とかゝき絵なと多くひひなあそびあとそるところに」とあるは紫上のいとささなきころにて、ひひなと、もてあそびぐさにもるゆゑなり紫式部日記に「このごろぼんごどもみな破り焼失ひ、ひゝなとのやつくりに此春し侍りしのち人のふみも侍らず」とあるやづくりは其ひゝなとおくべき家の料にかり源語紅葉巻に「つゝかひひなどもえてそゝきいてときせ其友かきの常によひろはすめる名

大むね

あすか川の淵瀬と替り、よし野山の花にのみ成ゆくめる世のたゝいもまひに、わらはべの戯れ遊ぶわざくれはかゑすゞろにふりぬる世覺えそ忘ばく、めでたきはあらさりけらし。ひゝな友あそびし、今の世、上已にかきるは、いみじくもてそこなへる物よて、もとの心にあらも常に童の紙もて、ゝとこ女の形と作りるゝて、きぬのさ

国立国会図書館　タイトル『童話長篇』　請求記号 862-45
ガラス使用

ねんぶつ云云またちひさきやどもつくりあつめて奉り給へる事なども見えたり

なごおほせて、物の本ふどして、それか屋を作り
文として、互に行かひせしめふどもそう、是ふんま
ここのひいな遊びにて、源氏の物語ふとよう見え
たるにも、いとよく叶へるそかし、さて石なご玉

いしなごりは小大君集に有ほんいしふごりの石をつゝませ給けるに三十一ありつれば一つに一ゝじゝ書きてまるらせける　其むさは拾もかへんさゝれ石の數にみおとろちよはいゝつぞ

は、小大君集に見え、しばまの遊びも源氏にいで
たり姫氏の小兒は、枕の草紙に出、かつらこのた
はぶれは源の仲政集に見ゆ、其外何くれの遊び
わさも皆古へこいろふらざるはなし、さくじり、を

散木集音歌集にいしふとりの石合といふ事も見えたり

よづけしてゆくまに〳〵、心をわざも時につけ
と見えいしまの遊

つゝうつろひそこなはるめるを、天地の神のな

は源語末摘花巻にいくそたび君かゝぐまにまゝのまゝふる、わらは心にはそのたのしき思ふけぬらん物ふいひそといはぬたのみに

拾玉集憂き身にはしばまとだに心えこそせぬ

わざもその面白しと見る物も、ともに、古へ今の
へたてふく、どこゝたゞ替らぬ成べし、それか中
思あまれば獨言たれてとあり物いふことを止にも昔ばふしとかやいひて、もてをやそめるは、
むる遊なり

ひめごりの小兒

花草紙いづゝの浦のはて〳〵迄も、おなじ筋にかたり傳
ゝつくゝき物ノ下ゝりにかきたるちごのかへて、いともいゝをふるめかしく、童のこゝろに
ほ抄云、姫氏の事なるべし骨董集云、小兒戯ひに、目口鼻を書く此故に姫氏といへりと云

は、いみじう、をかしく聞物ふりけり。其さま、大方
は神代の古事なと、爰かしことり、語り傳へたる
ふどにて、もとも古代なる物にふんありける、つ
ら〳〵思ふに、日本紀の神代の巻を、一書〳〵と

国立国会図書館　タイトル『童話長篇』　請求記号 862-45
ガラス使用

て、あけられたる、しるしくだせ、さやうの筋ゐ上れる代より、語り傳へたるなどが世々をふるまゝにかたもしよゐゑまり、よこなまりつゝし今に傳はりたる、物がたりゐもあらじか、よしさらゑ、としこと〳〵く、古き書どしゐ、擾ありて、いこしいとをめてたく、をかしき物にそ有ける。されは、おのれはやくより、童語考といふ物をつゞ王て、是かしとの起りをかうがへ、古きふみどしに引合せてあかゑなゞせはや、と思ひよりつゝを、例のことしげくて、いまだ得はたさゞさるをこの春いき

清雄云、少彦名神の事は日本紀神代巻に、伊邪那岐命の事は古事記上巻に見えたり

さかのいとまゐひまゐ、心やりぐさに是か心を長歌に、つゝり戯れたるを、かいつくるにいてゐ今其あらかたをいはゞ桃太郎といふはゞ彦名の神乃、かゞみの舟に乗て、いゑさのゐ濱に流れより玉へりけんが後に粟からにはゞかれて、常世の國に渡り玉ひぬ、といふ古事に、いさなきの尊の、桃の實して、よもつ軍を追やらひ玉ひし古事を、取交へて語王傳へたる物とこそ聞ゆれ桃の中に入て流れよりつゝいふより、粟のをちひして、鬼か島に渡り、鬼を拂ひむけたりといふ其

名に桃をしておほせたるは全く桃のあしき物と拂ふ、いざなきの尊の古事によれり、さなん覺ゆる、隠しのかくれ笠のことも後拾遺集の歌を見たり、又勝々山の昔語は、古事記に見えたる、いなはの白兎の、神の一ッ乃傳へこもいひつべく、且狸かほやけるたで酢をぬりたり、といふあたり、かの八十神の教によりて、苦しけん面影ありて、龍宮のおとひめは玉依姫の、大亀をめりて渡れりといふつたへしあれば神代の巻の、わたにみの宮の一書とをいひたべしや、且くらけがロ

清雄云拾遺集に本文に後拾遺集とある後の字は衍ゐめり忍びたる人のもとにつかはしけるかくれ蓑かくれ笠とも得てしがおきたり來着ヲ蓑又と人に知られざるべし

さがふきをにくみて、骨をぬきしより今もくらげに骨ふしといへるは、古事記に天の宇受女の命の、この口や物いはぬ口さて紐刀もて、さし玉へりしよ至今も海鼠の口さけたり、といふ傳へに似たり。さて又、罪によりて、骨を、ぬけるも須佐の男の尊の、天津罪によりて、ちくらおきどの拂へた物に、手足の爪をぬきたる、といふ其ためしこしいひたべし又くらけと、海老と、むつぶる事は砂石集の歌に見えたり。猿蟹の、あたかは日本紀の神代乃まきふる海幸彦と山幸彦と、互に幸を

清雄云素盞嗚尊の此祓の事は神代紀に見えたり

清雄云砂石集を閲るに巻第十下(三十一丁)に東福院山、一眼法にヨリテ

国立国会図書館　タイトル『童話長篇』　請求記号 862-45
ガラス使用

育テオハシケル時、松島ヨリ法心房上人一首ヲ送リ進ズ

本来ノ面目ヲタラハ水母蝦ノ眼ハ用事ナカケリヤナ、是ヲ世ノ人ヲカシク思テ荒山ハ讃ラレケル心地アル歌也經ニ水母ノ食ヲ求ルニ海蝦ヲカリテ目トストイヘリクラゲ目ナキマーニヨビトツレテカノ目ヲカリテ食ヲ求ル也

取かへ玉ひしより、山幸彦に、いたくせめられて、海の神の、力をかりて、終にいみしくたしふめうへ玉ひぬ、といふ古き傳へを、海の物と山の物とをおほせて、をゝしく語り傳へたるもしやあらん蟹をもしいへるして、蟹もりづうさ、かゝる食ヲ求ルニ海蝦ヲカリテ目トストイヘリクラゲ目ナキマーニヨビトツレテカノ目ヲカリテ食ヲ求ル也と、くさおど蟹を專らとせる、古へこゝろ思ひけるに且猿は猿田彦の神の、ひらふ貝に、手をくひ合せられて、海におほれて、神さりましつとある古事記の傳へかどゝ思ひよせけん、ふどもいはぬいふべし。また本艸といふものに、蟹虎とたゝかひて、虎もしのをといふ事ふんある、其心はへもあるゝ似たれど、さる事迄を引出んも、中々に古へ心にあらじ。ふ便の川の物語は、いとゝいたゞたもけたるやうにはあれども是も神代の巻の一書に、いさなゝの尊ゝおはれまして、いさふきの尊、大木ゝのほりて、ゆはり、まり玉へもは大川に成きとある古き傳へにゝよれるそかし。舌切雀も宇治拾遺に出たる、雀の子の、もねそこるひたるを哀み養ひて、はかちたるか、ひさこの種をく

清雄去宇治拾遺物語三に出でたり

はへこゝを、まきてみのりたる中より米いと多く出たれば隣の人、うらやみて、わさと雀をおそこねて、とらへ養ひて、はふちたるか、くはへこし種のひさごよりは蛇ふん出たる、といふ物語の一ノの傳へとぞ聞えたる、且ついらこ乃内より虫どもの出ゝといへるは、則大祓にいへるはふ虫のわざもひにて、古事記の、へみの室や、むかで乃むろやふといへるにも、おのづから通ひて、いみじき古へ心々る物也、花咲爺は是もおなし物語の、齋の翁のむかゝ語を、其起りともいふべく

清雄云蛇室蜂室呉公室の事は記上巻に見ゆ

清雄云巻第一に記せり

ふん。猶古きふみとゝもに、あかゝ多く、上れる世の手振忍はれて、めてたくをろかしきか、數多ゝれと今は唯、歌につゞれるついてに、それらかゝへをけふ、片はゝとゞでたるにふん有けるもむせゞめとまりみとせといふ年のやよ

文政十三年八月日

ひやゞか

平翁滿

目録

詠舌切雀長歌幷短歌　詠桃太郎長歌幷短歌
詠勝々山長歌幷短歌　詠猿蟹長歌幷短歌
詠花咲爺長歌幷短歌　詠乙姫長歌幷短歌

以上

書林にもはれて譯註するついてに誤と灼然(イチジル)きを改めし字とも有り。つかひざまのあやしくて頭かたぶけらるゝも淺學の猥に改むましきは其所乃きまによりて譯しつゝ語ともを有り看む人然る心せられてよ

明治廿三年八月

小田清雄

清雄之図とめが袖ふる山のみづ垣のはゝ〜といはんための序にたけるふり

清雄之梓乃はハルの枕詞ふり以下左京に施るは皆同じたぐひふり

舌切雀

ととめらか袖ふる山ゆ、みつ垣の、久しきときゆ(ヨリ)
語りつき、いひつきけらくいにしへに翁おむか(姫)
有けらし。おきふは山に眞柴かりおむふと、川に(言)(繞)
古衣(ルユロモ)ときて洗ふと烹(ニ)しり乃りを。雀くひぬれ梓弓
はるべききぬゆ、をへをふみ、ゑこつ雀、此舌やの(衣)(為方ナサニ)(醜)
りくふゑたと、はさみして、切てをるちぬ。足引ゆ(喰)(舌)(放)
山より翁歸りきて、歎きいきづき赤良ひくあし(前)(來)(息)(朝)
たはゑかひ、ぬはたまゆふさりくれはとくら(飼)(養)(本)(夕)(増)
たて、めくしがつくし、ゑたつみの、かさりの玉と(蹠)(愛)(海)(神)(挿)(頭)

国立国会図書館　タイトル『童話長篇』　請求記号 862-45
ガラス使用

手よを忘て、在こし物をぶれたくも、をちけろ
かを、心かく、舌さへ切ぬ、今更に、かへりこめやと
あしをりしさけひおらひたむかをは痛くころ
びて末終にゆくへまかんと玉くしげあくかれ
出て、我鳥の、宿りやいづく舌きれる雀やいづく
ちいけみのちいよ〳〵と音にかきてありかと
めつい、山けそき野のそきあけはいくみ竹こも
れろかげに、たしみ竹たしにあへして、くさぐ
めためつしの出し、つぐらこれ於もきとのろき
家つとを以づらと悩へはりつせこの世は遠人
苞苴

清雄云いくみだけは業尋の茂く彼と此と入交あへる竹をいふ

は、重からは、帰さにあへどと、つぐらこのかろき
をおひて、玉ぼこの道もやすらに、つまごもろ宿
にきつきて、あけたれば玉まこかねに銀に寶は
きはみ、うまこ豆の河やにしきさへ、そこらくに
あらくを見てそ於むなも雀は宿り、こまつるぎ
我も悩んと、ふくつけき心ふり起し舌きれる雀
やいづくちいけみの、ちいと呼つい、とめゆきて
かく老ぬれど我はもや、重きまあへんとついら
この輕きはとらきてあへぐ〳〵岩根さくみて
なつみつい、家まかへりでかき數ふ
たをとれ

国立国会図書館　タイトル『童話長篇』　請求記号 862-45
ガラス使用

清雄云這虫の災とはあらゆる虫に蜚るゝといふとそ

祇ば、もふ虫の、わざもひ出てむかでさし、あむかきつき、谷ぐゝは眼ゑゆまり、へみさへゑうなゑ
ゑまとひて、おむかは終ゑまゑけり、ねおけんれ
物のむくいは、いちしはのいちゞろきかしすむ
やけきかを

いさゝかけのりをいへとも庭すゝめ
くをもは舌もきられさらまし

桃太郎

人習ふ、人の世ゑして、神ふらふ、神代ゑ近き、古へ
れ、語りごとし、こをは今に傳へて、いちゞろくい

ち紫かゑと、足引乃、山路にをぢをいでゐたしお
むなを川ゑ、たへかほ乃、衣を洗ふ、上つ瀬ゆいづ
ての舟乃梶のとのつふらつふらと、さにづらふ
桃ひミつふしたゞよひて流れしよろをひりひ
つゝ、今猶ひとつ、よりこなん、をぢにしかをとい
へは、又つぶら〳〵と、流れよろを、こしにひをひ
て、帰りきて、をぢしくはんと、やしほをりのひし
かたなをて其桃をわりて見たれはさき草の中
にあやしき、みめづこの、入てしあろを、手にすゑ
てうつくしみたゝ、王ちばふ、神つみまろと、つゑ

清雄云伊邪那岐命桃実ニ大カムツミノミコトいふ名を賜ひし事古事記上巻に見ゆ

清雄云千引の岩とは千人し、かゝりて引ずば動かざらん盤といふ義なり

清雄云い。渡る。往くアドノ。ハイハユル咒語ニテ意ナシ

き太刀、名をおほせもて、天傳ふひたしうらがし、あらたまの、としをへぬくま、くはしほこ千引乃岩し、たなまま、さいくばかりの、たちからの、たけをとゝりて、いへらくも、常世の國の、根の國の、よしつ國に、い渡りて、鬼のしたこ、宝とは取てこまし、栗つきかて、きみにきかてい、たはらんと、まかりまとして、いそのかみふるやとこの銀の、目貫の太刀の、組み緒と、とりしでつい、こふ鳥のあすか男のぬば玉の、黒ぐつきしはき、栗きみをこしにかきつけ、むらきをの、こゝろふとくも、か

しのみの一人出たち、足引の山こえ野こえ里越て、いゆくまゝ、里よりはゑぬまろ出山より

清雄云くごいノ。ハイハユル感動詞ニテ呼ビカクル聲ナリ

も猿丸いて、野つ鳥きゝし出て、ちもやぶる神つみまろ乃、くごい、いつちゆかを腰ゝは何かおはせる、かこゞをのひとたはりてあとしはれいつちし行んと、なく兒ふすまたい來ぬしは我はしや、よしつ國乃鬼れたから取ゝそいゆく、こしかゝは、大やしま國ゝ名くはしき栗乃かちひ、きみれかちひ、一つとないひそ、三栗れなかは分てあたへんと終に引ゐて、百足そハヤしまか

清雄云そきへハ退キタル方ヘノ義ニテ遠ク離レタル方ナリト云

くり、天地は、そきへは國乃、岩たゝむ、鬼のむろや
に、たゝふべていゆきいたれは平坂に五百引岩
とひきさへて、よしついくさをおこしつゝ、あた
みいとむとゝ太刀かきし、ほこゆけやさしをたけ
清雄云やさしハ矢筈ト絃ニかくるゝと云ふ

びて、はやちの、くさばふくごとく、鬼のことゝ
拂ひむけたひらけぬれは、犬し物ひさをりふせ
てうづらふもいはひとろかみいのちも、ふとり
玉ひそ、此國の、寶のきはみ、まつらんとあふきこ
ひりみ、つき榊いつきまつるをいこりきて、をち
におむふに稲城を、こかねの庫ほぐら、きしのふ

清雄云あやゝ事物ニ感スル聲ニテイハユル感動詞ナリ

いへづゝにすと、志ゝくしろよみのくぬちに、う
しはけろ、鬼乃もたる寶は、かくりみの、かくり笠、
うち出の槌と、ゆらゆらに、ゝりゆらかせは、まき
柱、ふとしきたてる、はしたてのくらし、いふきし
庭中に、ふり出にけり、くれをとりあやにくすし
き、鬼のたからかし

いさふきの神乃御世にしかんつみぞ
よしついくさは於ひやらひけろ

勝々山

清雄云ふほーしとハ生繁木ノ義ナリト云

清雄よーえやーはよーしやといふに同じ

石の上古き傳へを、いやふるに、いく世を經てかたがり木のいやつぎつぎに、磯貝のかたりつぎけん、古へ乃、去つやのとぢ、月に日に、かな木をこつと、やき鎌乃とかまと持て、足引乃、山に入たちおほしとし、このしとかまて、岩めへに、やもらふべに、たゆまたゆ、くきしかれひを穴ぬちのたぬとりてみぬ、よしゑやし、かれいかくとしよしゑやし、たぬを取んと松か枝を引よぢきて、穴ぬちを、やけばいぼりにむせひつゝ、はひ出るを馬じ物縄取つけて、ふとりきて、軒端につなき、か

きろひれゆふかたまけて岩つかめ歸らんいまにあつ物を、烹てまたさねと、庭中につき雌たて、みしねつくおむふにまけて又更に出てゆけれはつかえし、たぬかいへらく空數ふおほばりとじ我縄式解ていこはせ稲つかん、われ稲つかんこ、たはかりて、とかえて終におむふをば、くひていにしを青雲れきらもてをちも、歸り來て、いかりみふきみ。みづし若きどちよりいつがりて年月まねく、古衣馴るまに山れ井の淺くは思はもたれ底おきを深めしふみくも

清雄云ふは本屋翁やとめてにをハトイハレタレドアル人ハそのニ通ヒテ指ス意アリトイヘリ

清雄云かゝしもトハ愛妻ノ義ナリそのハいしもノいノ略カリしナリ妻ヲ古言ニいしもトイヘリ今イフ妹ハ北トイヒキ

のつくし妻、あしたにも、行てはやこと、薪こる
我を見送る、ぬは玉ゆふべにぶれは金戸にの
我をたちまち、足引の山行衣、稲つきてかゞる手
をして、かき洗ひ、かにもかくにも、菅の根乃ね
ころごろに、黒髪の白く成まてむつひこし、わが
悲し妹をうれたきや、たぬにくはえて、かこ物
我身ひとつは、いかにして、在へてましと、かりこ
しめ思ひこたれて、ぬえこ鳥うらなきをれはた
くひれ乃、白きをさぎ、入来て、なゝさめけらく、ふ
まよみのかひふき事を、うらぶれて、ふけきせん

愛 朝 立 待 ナニ、ツケカニツケ 睦 懇 切 慨 食レ 経 心ニ泣 乱 兎 慰 居 快 ク ぶれて 歎 早ク歸レ 門 戦

よは、かれひとり、とれにはらん、なかつまの、あ
たむくふんと、やき鎌の心起して、のぼりたち、
山のふし柴、かるなへに、かれひは、引あみ
のよ玉來てたぬがいへらくは我にをたはれ、ふ
かた色ゑ柴からんこふ、然しあらば、のらんまに
まと、ふし柴を、ふさにおほせて、帰るさに、はやき
きたてい、火きりうす、火きりきねして、ほとほと
言になかけそ、此山も、ほとし山と、たばかりて
おひたる真柴、めら色ら、火をさしやけば、其音

ヨリ 銅 賜 敏 仇 登 喰 賜 汝 寄 時 云フニ イフ 言ニ隨ン 最 負 彩 負 杵 火ヲキルオト 誑 負 シバノヤクルオト

清雄云火きり杵火切臼は古キ火ヲ揉出ダシ器ナリ其古名ヲ今ノ火打石火打金ニアテ、用ヘリ

を何そと問ふに玉かづらかけてふいひそ此山は色らめら山と露霜の置ていにけり、せんすべの、そこになければ、しゆう火にそひらやかえて、こいまろび、ふきてゝをるを、眞玉つくをさきと（燃 脊 焼 為 術 去）

び來て、かたらくは、あやにたふとき八ヤ神の、救（展 轉 泣 詔 尊 兎 訪）

ゝれきく八ヤ穂たてを、ほづみはやして酢にかて（手 聞 穂 摘 交）

て、むさましかは、はたすゝきほやけろ疵は、たち（浴 蓼 穂 火傷 忽）

まちに、いにん物そと、あかをたの、ためにあむし（癒 赤 裸 狸 アフセ）

早川の行へしらに、きけちてやまのとかあ（方不知 消 陰）

ゝ、とぶさたて舟木きりつゝ、まかふもて、けづ（鉋）

清雄去とふさたて山の木を伐り時材と切株に立てゝ山ノ神と祭ることゝ

にて今世も然為とぞ

り、たくゝさらくを、痛さにあへぞて、うつせかひ（木コレラヘシテ井ル）

みふとにみそぎ、かまめ穂を、取つけんと、來む（湊 身 濯 堪 向）

かへる、ためがき見て、ふにすとろ木けづろてへ（來）

は、海原のきよきつくよを、鴨しもの水にうかび（月 夜 浮 トイヘ）

て荒鹽のしほのやほぢし、まそ鏡見まくほしけ（八百路 欲）

清雄去海潮は恒に東へ流るゝと其中に潮路といふもの所々に在りとそ

く、くだから舟こそつくれ、つるき太刀ふもゆ（往）

かさねと、あざむかれ、岸のはにふに、北ぢりこを（キナカレ 欺 レ 埴 土 汝）

手よかきたりて、はに舟を作りかた色て諸共よ（垂 埴 土 泥 共）

波につらふべ、さをさして、いさき出れば、はにふ（列 並 掉 固 滑 ツ チ）

ねは波のまに〳〵、みふそこに、去づきてたゝね（隨 水 底 沈 狸）

国立国会図書館　タイトル『童話長篇』　請求記号 862-45

ガラス使用

うたかたは、みなつぶたち、たまきはる命にけ
り水傳ふ磯たちならし、ゆふかつむ、めざしがと
し、ふか宿の、さすなべして、こうまし物たぬの
あつ物、こいらにて、をしてん物と、たばかりて、お
のれはやくひ、なべぬちに、くそまりちらし、いか
くりて、いをのふせろを、草むらゐ、色ざしがとも
まぎ出て、枕のあとゆ大ぬさの引手あまたに、め
かろへん、すべのかければ、こしりづめいけどら
えつ、あざむきて、いひけらくは、しが母めほと
めいろさ、くらべふん、勝せろ兒や、我命いとらさ

ぬ
ん兒と、あきぢ原野べに去。ゆふ、空言を誠と思ひ
て、わが母は、かくなもいろきと秋花の、しがさま
ざ、手をのべて、きいくろいまに心とく終に乃
がえぬ、ぐまごりのあやしくくしき白をさきの
神とし神と、たふときろかし
けたの崎わにあざむきしいにしへ
兎を神といはれにけり

清雄去ろ。ハ語ノシラベニソフルノミニテ意ナシ下ノ句モ同シ

清雄去出雲國氣多崎にて兎ノ鰐欺キシ古事古事記上巻ニ見ユ

猿蟹

かきろひの岩根木根だちおしふふ草のかき葉

こめやく小猿
清雄云按コハ皇極天皇紀ニ二年冬十月戊午蘇我臣入鹿獨謀下廢二上宮王等一而立二古人大兄一ヲ時有童謡曰
いはのへに喻ニ上皇一こさるこめやく喻ニ入鹿一こめだに心たげてやほらせ、かまくらのをぢ山背王頭髮斑雜毛似ニ山羊一又云

も、くすはしく言と語へり。けん、神の世の古事ふらしおしてるや、難波の小江に菴つくり、なまりて隱とるあしがにの葦原蟹ガ誰めすと召かし、ゆふつゞめかゆ彼往きかくのきよこさら此往ふ、道のくまを曲に、かれひを飼し、ひりへる時に、岩の間の、こめやく小猿、米ならし拾ひが住山の、山柿の、さねを種子ひて、をし物は、食ぬ、しがに已はは、さねを種子まきておほを生ば、天地の、蒔はに、年みのり榮んけたしや、蓋おほ已ぬがほる、かれひはみにきあ欲食はは、さねまきおほして、すむやけくならも速

葉捨其宮匿深宮相也と在る喻詞ととれるのみにて小猿が米焼き事実あり一にあらず

はきらん、爪斬大づめして、以ならもは枝と、いきらんと朝間よひさらも、菅の根の根ねころ〳〵にこひめ斬ナクみし、去るしとかし、たち忽然まろに、こだ枝虫里栄えて、花咲実さき、みに成たれミ、かき掻とらん取よりのなければうらふれて、たもとねる徊まに小猿來て、よちて。愁徘ふ禁手取んと枝たゞめ、こぬれ間にのほりて、さにづらふ熟柿のことゞ、おめれのみ、うまらにくむて、いや最皆悉はてに、さをふるひとつ、蟹のせに、たうてにけれ己青後ばよ装ひたる、かはらやぶれ、そこふはれ、いたて甲一撫脊傷重傷堪へ破過てい死ニシテ十リにしを蟹の子のガ

思ひしぬびて、悲しけく、そこに歎かむ、いらふけく、そこにいきて、ちいのちの、父のあた、むくいんと、八童山越て、玉ぼこの、道の長路を、かこ物

一人いゆけば、よく すに、栗に、蜂に、きしむかふ心もあらぬ、物すらに、親うつくしむ蟹の子の心あはれと、ふくこふもしたひまつろひ、ひけ鳥の共に、ひけつりふせやたき、すいしきそひて、山猿の岩屋にいなり、かまぬちに、栗ゆかくりて、あし火たく、猿が面とに神のごと、鳴もためきて。たばしれば、ほやけとあつみ、岩走るたるみにひてんと、

清雄去あしびたくトハ葬ヒ薪ニタクナリ

いすいぎて、出たつ庭ゆ、蜂の來て、目にのきつけば拂ひあへぞそともに出る、軒端より、家もとゆ、ろよ、よくすり、落まろひ來て、たちまちに、おしたれて、いきめとは終に絶にき、蟹のかはらおつるがごとやふれしがごとや

ちからふき蟹の子すちにうつくしむこころゆ親のあたはづちにき

花咲爺

赤根やすひろはしみらに、ぬば玉のよろはすが

清雄云ヒハイハユル発語ナリ志ゝ田トハ猪ノ來テ荒ラス田ヲ云フ

らに、金戸(門)しる、心つくし、親めごと(如)馴るめくし(憐)
や、たこらはと(守)、もりひたすごと、新玉の月日重ね
て、真玉づくとぶち(童)乃犬を、かふとちの(育)、すき手に
持て、さ(斑)山田の、志ゝ田かへもと(養)玉ぼこ(叟)乃みち(鋤)を
出れば、ふち犬し、いやさ(最)きだちて(耕)、物乃ふめ岩根
ふみさくミ、足引の山にいゆきて(往)、松か根にひぢ(膝)
折ふせ(伏)、まゝとよへど寄も來らぢ(ノ)まゝとよべど
かへり見もせぢあらかね乃、土を爪もて、はらゝ(散)
かし(顧)、炎ほらさねと、かきかけばいうにふ事とい(ア)
ぶかしみ(塩リナサレ)、もきばね見れば、あやしくもくすしき(奇)
(ヤシクテ)(撓)(異)

かもし土乃(ト)むた(共ニ)、こがねこ(金)きだく(許)、ほり出て(多)、ひり(堀)ひ
取ぢゝ、岩つ(拾)ちの歸り來ぬる(許)と、諸さや(堀)の家と隔
て住さぢ乃、いたもと(甚)もしみ、其いぬ(犬)を、ま(憎)ましと
(羨)て、馬ど物、縄とりつけ、引たてゝ、山路にいゆき
松が根に、ひさとりふさ(ノ)しめ、こいほ(堀)れと、のきも
かゝぬをかな(鉄)もきに、すきばねつゝ、まりおけ(タレテオイタ)る
犬乃ふるぐそ(鋤)物さはに、多くほり出てゝ(烈)ちはや
く、いかりた(怒)けび(呆)て其犬を、いたく打ふせ(叱)たまき
はる命しせ(殺)て松が根め、くそ(糞)ほり出し、穴ぬち(中)
に埋みはてゝと、おとづ(了)れの、たはは(安)とふらぢ語(言)
(語)

国立国会図書館　タイトル『童話長篇』　請求記号 862-45
ガラス使用

りつぎ聞つぐとぢて、足ぢりし、ふきいさつれと
かまとみの、かひ〻、なげければ、とめもきて、しろし
の松ぶきり來て、てとめぬとし、さひつるやか
らうを作り、つくいねの、いやますまもに多くの
み、成まされいば、くれはどりあやしきすと又
更に、隣のとぢ、ともしみて、かり持行て、去がつけ
ばつくまに〻、くだけ散て、米のことく、露霜
の、けかしぬるを、見るまてに、あらもふりけり、
然れこそ、いきぞはろしみ、足引の山たづ持て其
確を、たいきやぶりて、かまぬうちに、たきをへに

啼 泣 詮 尋 伐 斧 音サリ 鳩 弾 益々 臼 増 義 碎 消 失セタル 憤 有 其 アリキリ 鐺 中 焚 畢

けれ、いとせめて、しだ得あらねば、灰だにをて
かつまに、取きて、庭にちらせば、枯たて、ふこぬれ、
こゝとこゝ、春花の、咲とさけるを、さすたけの大宮
人の、香ぐはし、梅のめて花ぐはし櫻の色でと玉
ほこのみちのく山に、咲花の、くかね銀物さはに、
多くたばせる、玉だれのをぢがよごとをやき太
刀の、隣のをち聞つきて、我し得てんと、かまぬち
の、灰かき取て、うち日さす、宮路に持出、枯木に
花さかせてむ、くずはしく、枯木に花を、さかせむ
と、くばひほこらひ、然まけと、花し咲出ぞかくま

悲ニタエカ子 黙 散 籠 皆 悲 愛 陸 奥 黄 金 言 事 翁 賜 寄 妙 ミヤコ 呼 誘

けゞ、ふくみしせゞて、風のむた、大宮人の、まな内に、灰吹いれつ、おふけかくなめきやをこと呉竹のふしこりまして、たはせる、とつかつるきの太刀もちて、きらえておのが血にあえて、歸らひぬると、くれふるの、みけしたはりて、あがとぢに、來ますと妻のたちまつらしき

おとひめ

こゝろせよよきしなのしきもいちしろくしめいむくいはある世ふりけり

沖つ鳥鴨つく島のわたにみの、宮のおとひめ、病して、たやせる時に、八百萬、千萬魚の、つとひつゝはかりけらくは、山にすむ、猿とふ物の、いきもと、と王てまださばすむやけくいなん物そゝ、百重波千重波しぬき、亀ゆきて、猿とたはかり我國の常世の嶋の、うまし物、にづらふ柿、得しめんと、せにかきのせて、うかさを、としふひ歸り、去ぢくしろ、うまし小濱の門のべに、去ましたちまて、とれゆきて、たゝべしてんと門めちに、亀ハ入にき、かどもりのくらげ、ハへらく、猿まろい藥つ

くるとおのがさい、ぬまくしらに、はろじに、
あざむかえこし、哀さと泪おとせばたとろきて、
くひなげかへざせんすべの、そこにかければ
ひけ鳥のひかれて終に、みやわちに、さしらひて
我きしは、ふりにしからに、落たきち、流ろい水の、
清き瀬に、そいき洗ひて、松か枝に、かけおきつれ
ば腹の内は、今のはなし、よしゑやし、今のはかけ
れど、よしゑやし、道は遠けど君が為い取こまし
て、わたつみの、宮とのがろへ、又更に亀にろり

製 肝 來 悔 歎 宮 中 伺 侯 肝 穢 故 侍 婢 虚 言 逝

清雄云赤女ハ鯛ノ古名ナリトゾ と赤星のあかめ鯛めの、まかかちに、そごとい

つゝ、足引の山はいたれば、たちまちは、岩根はよ
ぢて天そゝり高きこゝぬれは、くき傳ひ、あゝ志や
こゝと、およびさし、あざゝ笑へば、足もりし、いき
ごほれどし、すろよしの、かめはかければ、こたつ
みの、宮に歸りて、千萬の、魚よびつどへ、くらけを
し、あばめにくみて、玉きはる命志せんと諸共に
はからふべに、をわ腰と、おいくしめつゝ海老
の來て、歎ていきづき、墨染のくらげか命、たばら
んと、愁まとせば久方の、天つ罪もて、玉ほこの千
くらおきどを、おほせたゝ拂へつ物に、志が骨の

擘 疎 憎 指 朝 セ カタ 呼 集 海 月 殺 時 トイキヲツキ 老 ル バ 訴 坐 置 戸 負 其 ヲ

清雄云あゝ志やこゝハ朝笑ふ聲なり

清雄云天津罪國津罪ノ目大祓詞ニ見エタリ扨きゞハ罪贖フ祓物ヲ置

臺ヲイフ千坐トハ其數ノ多キヲ云フ

ありのことゞ、かきぬきてやらはれにけり、然れこそ、くらげのほねは今もかしてへれ

親

うろはしき友とこそしため海老なくはくらけはいのちしぬべかりけり

清雄云コノサシツギニ小便ノ川トイフガ一首アレド憚ルベキヨシアレハ除キツ

こゝ、翁か若かりし程の、すさびにて、此頃反古れ中より、ゆくりなう、出たるを見れば、こゝろめわらは遊ひを、又見ることいちすゝを、かしければ、ほこりをはらひて、わかうごゝもに、あたふ

童　若　人　與

安政四丁巳年六月

葎居老人

国立国会図書館　タイトル『童話長篇』　請求記号 862-45
ガラス使用

862
45

14284

此巻を浦上比佐子大人より借りて
写しおきぬ

大正十二年葉月

さかわ小

正憲

国立国会図書館　タイトル『童話長篇』 請求記号 862-45

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『童話長篇』 請求記号 862-45

ガラス使用